

マーケット概況（2021年3月）

3月の債券相場は、米国長期金利の上昇が一服したことから買い先行となり、10年361回債の利回りは0.140%に低下して始まった。4日にパウエルFRB議長が直近の金利上昇に対して具体的な牽制をしなかったことから、5日に10年361回債の利回りは一時0.150%まで上昇したが、黒田日銀総裁が長期金利の変動幅拡大は必要ないと発言したことが伝わると一転して買い戻され、債券先物3月限は一時151円88銭まで急上昇した。10日に米国で追加経済対策が可決されるなど、世界経済の早期回復期待からリスクオン姿勢が強まったものの、11日に行われた20年債入札が堅調な結果になると超長期ゾーンを中心に買い進まれ、イールドカーブはフラットニングした。18日から19日に行われた日銀政策決定会合では、長期金利の許容変動幅を±0.25%に拡大することを明確化した一方で、連続指値オペ制度や貸出促進付利制度等で過度な金利上昇を抑制する方針を打ち出したことから、債券相場は底堅く推移した。欧州での新型コロナウイルスの再拡大を受けてリスクオフ姿勢が強まると、24日に10年361回債の利回りは一時0.065%まで低下した。月末に発表された4月の国債買入オペ運営方針で、各区分の買入額が減額となったことから売り優勢となり、10年361回債の利回りは0.120%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は、入札、セカンダリー市場ともに概ね-0.09%~-0.10%台で推移した。5日の3M977回債入札は、最高落札利回りが-0.1005%と前回債から小幅上昇してスタートし、その後は-0.09%台の入札が続いた。最終的に3M983回債は-0.100%で取引を終えた。6M・1Yゾーンは、国庫短期証券買入オペを背景に、6M金利は一時-0.120%、1Y金利は-0.140%まで金利低下する場面もあったが、期末を控え投資家需要が徐々に限定的になると、月後半にかけて金利は小幅上昇し、最終的に6M982回債は-0.115%、1Y980回債は-0.131%で月内の取引を終えた。

<一般債市場>

10年政保債の起債は無く、ベンチマークとなる10年地方債の起債スプレッドは国債カーブ+8.0bpと前月比同水準で決定した。国債金利の上昇によりクーポンは節目の0.2%を超えたことから旺盛な需要が確認された。5年地方債は0.01%クーポンと4ヵ月連続の水準となり、新味に欠けたものの、国債償還月にあたり運用資金も潤沢なことから需要の弱さには繋がらなかった。既発債は全般的に期末要因の売りが限定的であったことから、スプレッドは確りと推移していた。社債は、トヨタ自動車が2,300億円（個人向け含む）を起債したほかは小口の発行が中心となり、全体の発行額は8,820億円と前年同月比3,700億円超減少した。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#361	0.140(1日)	0.065(24日)	0.150(1日)	0.120(31日)
#360	0.135(1日)	0.050(24日)	0.140(1日)	0.080(31日)
#350	-0.015(3日)	-0.065(29日)	-0.005(3日)	-0.035(31日)
#146(5Y)	-0.075(1日)	-0.110(5日)	-0.060(9日)	-0.095(31日)
#175(20Y)	0.545(1日)	0.420(24日)	0.545(1日)	0.495(31日)
#975-#982TDB(6M)	-0.103(9日)	-0.120(15日)	-0.103(9日)	-0.115(29日)
#976-#983TDB(3M)	-0.105(5日)	-0.110(5日)	-0.094(12日)	-0.100(30日)